

## 幼児期におけるレジリエンスの育成に関する研究 — 保育者の意識に焦点を当てて —

劉 梅<sup>1</sup>・七木田 敦<sup>2</sup>

### A Study on the Development of Resilience during Early Childhood — Focusing on the awareness of Nursery Teachers —

Mei LIU<sup>1</sup>, Atsushi NANAKIDA<sup>2</sup>

**Abstract:** The purpose of this study was to clarify nursery teachers' awareness of what is children's resilience and how to help them recovering from difficulties in kindergarten by conducting a questionnaire survey, and to present suggestions on the development of resilience during early childhood. The results clarified that most of nursery teachers think it is important to cultivate resilience during early childhood, but they don't have a comprehensive understanding of resilience. They tend to cultivate resilience of young children from the viewpoint of sociality and problem-solving. This suggests the need to provide childcare with a focus on the self-adjusting qualities within resilience. In addition, nursery teachers need to planning some activities to cultivate children's resilience, not only through daily involvement such as watching over children's behavior or accepting their feelings.

**Key words:** Resilience, Early Childhood, awareness of Nursery Teachers

#### 問題と目的

ストレスが満ちあふれている現代社会において、幼児も高いストレス状況に置かれることが多く、その結果として幼児の心の健康状態に問題が生じることが危惧されている。特に、幼児が生まれてから初めて経験する集団生活の場所である保育施設において、幼児がストレスを感じる人が多い。例えば、堀池ら（1999）は幼児がストレスを感じる出来事を「対友だち」「園行事」「給食」「遊び」という4つのカテゴリーに分類した。その中、「友達に乱暴される」「みんなから自分のルール違反を指摘・非難される」という項目、つまり「対友だち」において頻度と不快さとも高いという結果が出された（高辻 2002）。それに加えて、基本的な生活習慣でのつまづきがストレッサーとしても指摘された（小林 2003）。また、保育者の働きかけ（受容な態度、非受容な態度）により、幼児がストレスを感じることがあると指摘された（高稿 2006）。

これらの日常的なストレスは幼児が社会化す

る過程において回避できないものの、ストレスに抵抗するものであるレジリエンスを育てるきっかけとなる。Masten（2013）は集団保育現場がレジリエンス育成のきっかけであり、特に家庭環境で恵まれない幼児にとってはレジリエンス発達の転機であると指摘されている。

レジリエンスは心理学のみならず、教育現場や臨床現場さらに政策立案などさまざまな分野で応用されており、「特性」としてのレジリエンスから「状態」としてのレジリエンスに向けて研究する傾向がある（村木 2016）。すなわち、レジリエンスを個人が持っている特性として捉えるのではなく、レジリエンスを個人の特性と環境要因及びそれらの相互作用によるダイナミックな過程として捉えることが望まれる。幼児教育の分野において、幼児のレジリエンスを把握するため、保育者用レジリエンス尺度（高辻 2002；長尾 2008）と幼児用レジリエンス尺度（赤間 2020）の開発が行われた。また、それらの尺度を用いてレジリエンスを測る方法で、レジリエンスと問題行動及び日常的ストレス（古内 2015）・レジリエンスと対処方略及び母親の介入行動（山田 2008）の関連性について検討さ

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院人間社会科学研究科

れた。これらのように、尺度を用いて研究対象をレジリエンスが高い者とレジリエンスが低い者に分けて分析を行った研究はあくまでもレジリエンスを特性として捉えていると言えよう。しかし、尺度で測ってレジリエンスが高いと思われる個人は、日常生活においては適応的ではない可能性もあり、困難からの立ち直りのパターンには一つの経路に定まらない多様性があると指摘されている(村木 2016)。実際の困難からの立ち直りのプロセスに注目して幼児期におけるレジリエンスを検討することが必要である。

幼児期におけるレジリエンスとして「周囲から提供される要因」を考える際に、必ずしも母親をはじめとする家族メンバーに限定されるべきではなく、集団保育での保育者や友人にも着目される必要がある(小花和 2002)。また、レジリエンスという言葉は、近年幼児教育研究分野で注目されてきた(古内 2015)が、幼児教育・保育実践において日常的に使われておらず、幼児のレジリエンスの育成の重要な担い手として保育者はレジリエンスをどのように理解しているのかがまだ明らかされていない。

本研究では、幼児が困難に直面してから立ち直るプロセスについて保育者の意識やかわり方の特徴を明らかにし、それらを考察することにより幼児期におけるレジリエンスの育成に関する示唆を提示することを目的とする。

本研究では、幼児が困難に直面しているあるいは困っている状況から、うまく乗り越える能力およびそのプロセスをレジリエンスとして定義している。

## 対象と方法

本研究では、質問紙調査法を用いる。質問紙調査法は、日常場面における考え方や態度及び行動の特徴を把握することができ、多くの情報を一度に得ることができ、データ収集のコスト(時間・費用)が少ないという特徴がある。また、本研究では、保育者のレジリエンスに対する考え方の多様なデータが必要としているため、質問紙調査法が適切であると考えられる。

調査対象は、データ収集の多様性と可能性を考慮して選択した幼稚園2園・保育園1園・認定こども園2園である。

調査内容については、保育者自身に関する4項目、保育者がレジリエンスの理解に関する5項目、保育者がレジリエンスの育成に関する7項目及び自由記述1項目、合計17項目で構成さ

れる(添付資料)。Google フォームを通じてアンケート調査を行い、回収数は94部であった。

## 結果と考察

### 1. 保育者の基本状況

調査対象は主に女性保育者に構成されており、男性保育者は3人しかなく、全体の約3%を占めた。これは2000年の男性保育士が4666人(全体の約1.3%)であり、2010年には12100人(全体の約2.5%)と増えてきたが、全体の割合が少ないという総務省の国勢調査の結果と一致している。調査対象となる保育者は20代から60代以上わたり、その中20代の若者保育者が他の世代の保育者より圧倒的に多く、全体の38%を占めた。

そして、高濱(2000)は経験年数によって子ども理解の仕方がどのように異なっているかを検討した際に、経験年数で保育者を初心者、中堅者、経験者に分けた。本研究の調査対象となる保育者も初心者(5年以下)、中堅者(6-9年)、経験者(10年以上)に分けてみれば、約半分の保育者が経験者である。経験者は幼児と指導についての知識が初心者より多く、中堅者より構造化されている(高濱 2000)。つまり、調査対象の中で、保育に関する豊かなかつ構造的な知識を持っている保育者の割合が高い。

また、アンケートを配布した際に、現時点は3-5歳の幼児を担当していなくても、この前担当した経験がある可能性を考えううえで、必ず3-5歳の保育者をアンケートの回答者として指定しなかった。アンケートの結果によると、4歳児クラスを担当している保育者が35%であり、3歳児と5歳児クラスを担当している保育者が両方とも約15%である。また、「その他」に記述された内容に3-5歳児の縦割り保育を担当している保育者と固定的に3-5歳のクラスのいずれを担当していなく動的シフトで各クラスに入っている保育者が含まれ、全体の28%を占めた。現在保育現場での保育の形式や保育者の働き方が多様であることが分かった。

### 2. 保育者のレジリエンスの育成に関する態度

「日々の保育の中で、あなたはどの程度にレジリエンスを育てることに心掛けていますか」という質問に対し、87.4%の保育者は「いつも考えている」あるいは「状況に応じて考えている」と答えた。すなわち、保育者は日々の保育においてレジリエンスの育成が大切であると思われる。また、レジリエンスは非常に包括的な

概念である（小花和 2004）ことを考え、レジリエンスに含まれる資質能力を選択肢に入れ、「日々の保育において、あなたは幼児のどのような点をより大事に育てていますか。3つまで選んでください」という質問を設定した。その結果として、「ソーシャル・スキル」(85.1%)と「問題解決能力」(57.4%)の回答率が高いのに対し、「根気強さ」(11.7%),「知的スキル」(7.4%)と「衝動のコントロール」(1.1%)の選択率が非常に低かった。以上のことから、保育者は社会性と問題解決能力の視点から幼児のレジリエンスを培う傾向があり、同じレジリエンスに含まれている自己調整に関する資質能力を視野に入れて保育を行う必要性が示唆されている。

また、アンケートを分析する際に、保育者の性別・年齢・保育経験年数・担当しているクラスそれぞれが「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」との関連性を見るために、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果について、性別・年齢・保育経験年数と「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」の間に有意差があり( $p<0.05$ )、担当しているクラスと「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」の間に $p>0.05$ 、有意差が見られなかった。具体的に、女性保育者より男性保育者が「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」が高いことと、年齢及び保育経験年数の上がるにつれて保育者が「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」が高くなるという2点が分かった。1点目について、保育現場において男性保育者が少しずつ増えてきており、彼らが持っている特徴が幼児のレジリエンスの育成につながる可能性がある。例えば、「体を使うダイナミックな遊びができる」「園行事などの際に力仕事の主力となる」「安全管理や不審者対応に期待できる」などという男性らしさ・体力等と関連する項目（本多他 2007）、「活動性」「気配り」「繊細」という男性保育者に対するイメージ（戸田 2017）が指摘された。また戸田（2017）が調査した男性保育者に対するイメージの内容を詳しく見ると、「ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に遊ぶ時間を持つ」とする「いつも何か刺激的なことを求めている」「子どもが1人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時加わって一緒に遊ぶ」「子どもの心の変化に気づきやすい」などがあり、これらは幼児のレジリエンスの発達に何か影響があると推測できるだろ

う。しかし、本研究の調査対象となった男性保育者が3人しかいないため、性別とレジリエンスの育成を重視する程度との関係を十分に裏付けないと考えられ、今後の課題として人数多くの男性保育者を調査対象に取り入れて検討する必要がある。2点目について、初心者・中堅者・経験者という保育者の熟達化のプロセスにおいて、幼児や指導に関する知識が豊富、さらに構造化になることにつれて、レジリエンスというダイナミックな能力の重要性を意識するようになると考えられる。

その他、保育者の自由記述の中で、「レジリエンスを育むことは大切だと思うが、そのためのかかわりなかなか難しいと日々感じている」「子どもが困難を感じているときに、色々な姿としてあらわれてくるが、困難を乗り越えるという直接的なかわり以外の場面で、どんなことがレジリエンスを育てることに影響するかを学びたい」という考え方も存在している。

### 3. 保育者のレジリエンスの育成に関する意識

「あなたは幼児が困難を乗り越える能力（レジリエンス）を身につけているかどうかを判断する視点について下記から3つまで選んでください」という項目を設定した際に、「幼児期のレジリエンス尺度」（長尾 2008）における「気質」「傷つきにくさ」「自己調整」という三つの枠組みからいずれも2つの項目を抜粋し選択肢を作成した。「気質」から「何事にも好奇心が旺盛である」「今まで経験したことのないことでもためらわず、すぐに入り込める」を抜粋した。「傷つきにくさ」から「友だちに嫌なことを言われてもそれほど気にしない」「楽観的でそんなに失敗を心配することがない」を抜粋した。「自己調整」から「友だちから間違いなどを指摘された時に、状況に応じて自分の行動を変えることができる」を指摘された時に、状況に応じて自分の行動を

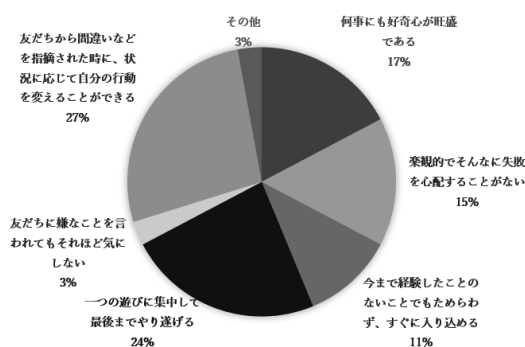


図1 幼児がレジリエンスを身につけているかを判断する視点1

変えることができる」「一つの遊びに集中して最後までやり遂げる」を抜粋した。その結果について、図1に示している。

続いて、図1の各選択肢の割合を「気質」「傷つきにくさ」「自己調整」に統合し、図2を作成した。「気質」が初めての活動や初めて会う人に対して肯定的な態度を示すもの、「傷つきにくさ」がストレスフルな出来事に遭遇した時にネガティブな態度にならないもの、「自己調整」が適応的であるために要求されるもの(長尾 2008)と意味している。それらを踏まえ、幼児がレジリエンスを身につけているかどうかを判断する際に、半分以上の保育者は幼児が全体的に適応であるかどうかを、29%の保育者は幼児が人や物に初めて出会う場面を、19%の保育者は幼児がストレスにさらされる場面を特に着目していることが分かった。

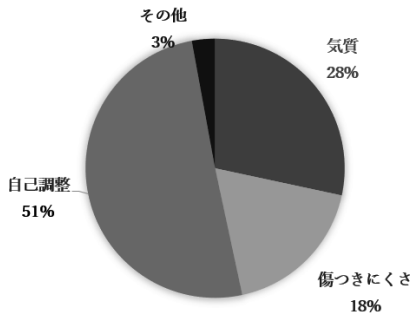


図2 幼児がレジリエンスを身につけているかを判断する視点2

レジリエンスを育成するための取組に関して、図3に示した。「家庭と園が情報提供や連携を行う」(86.2%)「幼児のトラブルなどをきっかけとしてかかわる」(75.5%)を選択した保

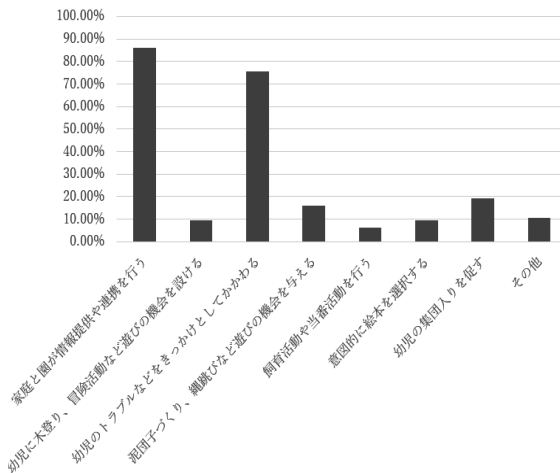


図3 レジリエンスを育てるための取組

育者が多い。「意図的に絵本を選択する」や木登り、冒険活動など特別な遊びを工夫して幼児のレジリエンスを育てることが少ない。また、保育者の自由記述には「幼児期で大人が特定の目的を持って何かを経験させるということでレジリエンスを育てるというよりは、子どもが主体的に遊ぶ中で様々な実体験の中でレジリエンスを育てることが多い」という考え方が多い。これらのことから、日常的な場面でのかかわりを通して幼児のレジリエンスを育むことが多い。これは遊びや生活の中での直接体験を通して行うという幼児教育の原則に従う考え方であるが、この原則に従うとともに、例えば、絵本コーナーに『スイミー』『赤毛のアン』のようなレジリエンスの物語に関する絵本を入れておくことができるのではないかと考えられる。

以上の保育者の取組により、保育現場で保育者がよくトラブル場面など幼児が困っている場面をきっかけとして幼児とかかわることでレジリエンスの育成を行っていることが分かった。では、どのような場面とどのような幼児の様子が保育者により注目されているかと言えば、図4に示した。図4の中で、「遊びの仲間に入れない」と「友だちとけんかする」を選んだ保育者が二つとも40%以上であり、「給食が食べられない」と「先生に話を聞いてもらえない」を選んだ保育者が20%以上30%以下である。「遊びの仲間に入れない」と「友だちとけんかする」は他児との対人関係、「給食が食べられない」と「先生に話を聞いてもらえない」は保育者の意図と関係している。これらのことから、幼児が「対成人」より「対友人」場面からのストレスや困り感が多いと言える。この結果は嘉数ら(1994)が指摘した、幼児が幼稚園で経験すると思われるストレス場面において、「対友人」

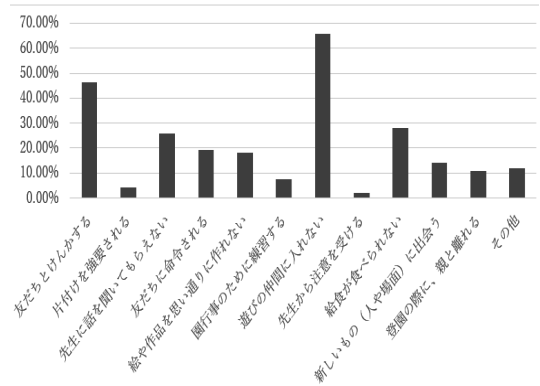
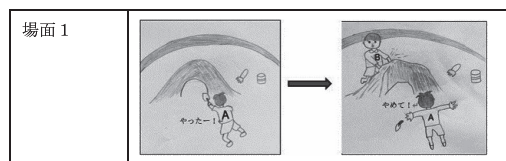


図4 幼児が困っていると思われる場面

が一番多く、その次が「対成人」となっていることと一致している。「対友人」場面におけるストレスや困り感が多いことは、幼児期からすでに他児とのやりとりが幼児にとって重要な位置を占めており、他児との良好な関係が幼児に満足感を与える一方で、他児とうまく関われないことは幼児にとって非常にストレスフルなことである(堀池 1999)と繋がっている。また、「対成人」場面におけるストレスや困り感が多いことから、園における様々なきまりに保育者の意図が潜在しており、幼児がそれらに適応していくためストレスを感じるようになった。

また、「イライラしたり、むしゃくしゃしたりする」「園(所)に行きたがらない」「何もやろうとしない」「よく頭やお腹が痛くなる」がいずれとも30%以上に選ばれた。これらは幼児が困っている様子として保育者に捉えられている。このことから、幼児が困難やストレスにうまく対処できない場合、行動・心理・身体上に多様な反応が起こしやすいことが分かった。保育者はこれらの反応をレジリエンスの育成が必要とするサインとして捉えるべきであると考えられる。

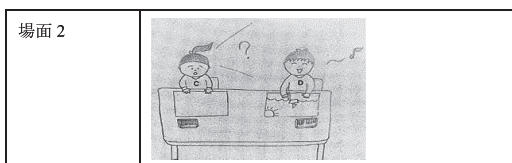
実際に日常的な場面での具体的なかかわり方を詳しく尋ねるために、質問紙調査で「場面1：大事にしているものが壊された場面」「場面2：絵や作品を思い通りに作れない場面」「場面3：危ないと思う場面に挑戦しようとする場面」という3つの場面を設定し、各場面をイラストで回答者に示した上で、保育者が「一番重要だと思うかかわり方は何か」及び「なぜこのようなかかわりを取るのか」を質問した。この3つの場面を選んだ理由としては、2点がある。1点目に、レジリエンスが現れる場面がストレスの負荷を前提とする指摘された(高辻 2002)ため、幼児のストレスやレジリエンスに関する研究(山田 2008; 堀池 1999; 高辻 2002)により、以上の3つの場面において幼児のストレスが適切に反映されていると考えられ、レジリエンスの場面として選んだ。2点目に、幼児が園で経験すると思われるストレス場面に関して、対人関係が幼児にとって最もストレスを感じる場面であり、その次は対自分場面と対活動場面であると指摘された(嘉数・井上・白石 1994)ため、この3種類のストレス場面で現れるレジリエンスと保育者のかかわりが異なると予想され、以下の3つの場面それぞれが対人場面・対自分場面・対活動場面として選んだ。



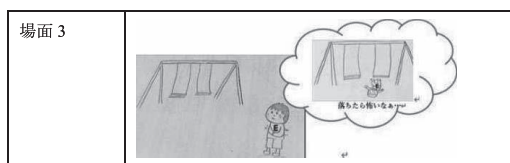
「場面1：大事にしているものが壊された場面」が対人場面であり、この場面について保育者が答えた「一番重要だと思うかかわり」は「見守る」と「B児に理由を聞く」であり、2つとも38.9%を占めた。また、「見守る」が重要だと思われる理由は「二人に自ら葛藤を解決する機会を提供する」であり、「B児に理由を聞く」が重要だと思われる理由は「背景をよく知ること」であった。これらのことから、対人葛藤場面において、幼児のレジリエンスにある問題解決能力を培うために見守ること、と問題の状況への把握が必要と考えて介入することが保育者に意識されていると言える。その他、「2人の関係性やその子の特性によって変わってくるが、A児の思いを聞きB児との関わりを促す」というかかわりも言及された。また、「5歳だし、2人がその関係性の中でどう対処していくのかを見守りたい、保育者がすぐ入るのは過干渉ととらえている」「年長なら自分たちで解決し、壊してしまった理由を話すかもしれないから」という幼児の年齢を考慮に入れるかかわり方が記述された。

これらのことから、対人場面において、保育者が背景を知ることと幼児に自ら葛藤を解決することを重視し、これは幼児期のレジリエンス要因のソーシャル・スキル(小花和 2004)の育成につながるのではないかと考えられる。援助しすぎず見守り、幼児が主体的に取り組むために時間を設けることが重要とされている。見守りの理由が「背景を知る」や「幼児の力を信じて待つ」であり、見守りの限界が「ケガにつながるなどの危険がない限り」とであると保育者の自由記述から見られた。保育現場で保育者の見守り行動が重要な意味を持つ。しかし、小藺(2016)は保育実践例への検討のように、幼児のその場面を切り開く力の実態を見通せていないために適切な提案をできずに幼児を困惑させることを「見守る保育」とすり替えて理解してしまったこともある。望ましい経験をさせることから生きる力の基礎を培うことに転換してきた今の保育において、幼児の発想や気づきをより重視されており、保育者の見守り行動が望まれているが、保育者の見守り方や見守りの限界

に関して検討する余地があると考える。



「場面2：絵や作品を思い通りに作れない場面」が対自分場面であり、この場面について保育者が答えた「一番重要だと思うかわり」は「丁寧に気持ちを聞く」であり、70.5%を占めた。その大きな理由は「C児が何も描いていない理由を知る」(30.5%)と「C児の描きたいことを引き出す」(35.8%)であった。これらのことから、対自分場面において、保育者が幼児の困っている様子を気づいて幼児の思いを知ることが重視されている。幼児は自分の思い通りにならないあるいは他児より遅れることに陥っても、保育者から気持ちを聞いてくれることがあれば、大切とされていると感じられるだろう。また、枝廣(2003)はレジリエンスの基礎である楽観志向を育つため、幼児期では自分の思った通りの結果が得られる「行動」を繰り返す中で、親や保育者に支えてもらいながら難題に直面しても頑張って乗り越える習慣をつけることが必要であると述べた。そのため、保育者が幼児の思いを知ったうえで援助をしてあげ、幼児の思い通りの結果になれば、レジリエンスの基礎である楽観志向の育成につながると考えられる。



「場面3：危ないと思う場面に挑戦しようとする場面」が対活動場面であり、この場面について保育者が答えた「一番重要だと思うかわり」は「E児の体を支えながら挑戦させる」であり、約40%を占めた。その理由として「E児に安心感を与える」を選択した保育者が半分以上であった。その他、「そばにいることをE児伝えるが、彼は自ら座らない限り無理には誘わない」という意識が数名の保育者にも言及された。また、「3歳では特に、安心感を得ることが挑戦してみようとする気持ちにつながる」と記述された。

これらのことから、対活動場面において、活

動に挑戦させることより、幼児に安心感を与えることが大切とされている。安心感を常に感じさせ、心が安定できる環境を作ることが幼児のレジリエンスの育成のために必要なものであると思われる。遠藤(2017)は幼児が日常生活で頻繁に見られる様子から「子どもの安全なサークル」を描いた。幼児は特定の安心感を持つ特定の大人がいると、心の安全基地がしっかりとし、自然と自分で歩き出すことも新しい経験もできるようになると考えられる(中山 2019)。

以上に加えて、保育者がレジリエンスの育成に関する自由記述には、「幼児が直面している困難の質及び程度」や「幼児の関係性やその子の特性」という配慮されているところがある。また、「先読みしすぎず、幼児の思いを優先にする」「困っているところを丁寧に引き出す、どうしたいのかな、どうしたらいいかなと聞き、解決法を一緒に考える」「子どもの性格にもよるが、もう少しでやり遂げ、解決できそうなときに少しだけ背中を押し」「少しでもできた時には十分に認めの声をかけ、自信を持たせる」「1人で乗り越えなくともそばに頼れる人がいるということを幼児に伝える」「思いを伝えられるように代弁し、困った時に手伝ってと言えるように誰にも言えるように育てる」、つまり、幼児の思いを尊重すること、解決法を一緒に考えること、認めて自信を持たせること、頼れる人になり安心させること、自己主張を促すことなどかわり方が保育者に意識されている。

### 総合考察

幼児期からレジリエンスを育成することの重要性が認識されてきた。本研究から具体的な育て方に関する示唆を提示した。

まずは、保育者自身がレジリエンスの育成を大切にすることが重要である。保育者がレジリエンスの育成を重視する程度と性別・年齢・保育経験年数と関係している。女性保育者より男性保育者が「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」が高いことと、年齢及び保育経験年数の上がりにつれて保育者が「日々の保育でレジリエンスの育成を重視する程度」が高くなるという2つの傾向が明らかにされた。このことから、男性保育者を増やして現場保育者における男女比例を調整すること、と特に初心者保育者に向けてレジリエンスに関する研修がレジリエンスの育成に寄与する取組であると考えられる。

そして、保育者がレジリエンスを明確に理解する必要がある。保育者が日々の保育でレジリエンスの育成を重視しているあるいは状況に応じて考えると自覚している。しかし、実際に彼らはレジリエンスにある一部の資質能力、例えば「ソーシャル・スキル」「問題解決能力」の育成しか重視していなく、同じくレジリエンスにある「根気強さ」「知的スキル」「衝動のコントロール」を重視していない。このことから、今保育者に重視されていないレジリエンスの資質能力も意識しながら保育する必要がある。

また、保育者は幼児の内面をより深く読み遂げる必要がある。質問紙調査で保育者の意識から、保育者は幼児がレジリエンスを身につけているかどうかの評価する際に、幼児が全体的に適応であるかどうかを判断し、そして幼児が初めて出会う場面とストレスにさらされる場面に着目する傾向がある；幼児期からすでに他児とのやりとりが幼児にとって重要な位置を占めており、「対友人」場面におけるストレスや困り感が一番多く、その次が「対成人」場面であると明らかにされた。幼児が困っている際に、行動・心理・身体上の反応として現れ、保育者はそれらの反応をレジリエンスの育成が必要とするサインとして捉えるべきである。

加えて、保育者は幼児のレジリエンスを育てるため、遊びや活動を工夫することより、日常的な場面でのかわりを通して幼児のレジリエンスを育むことが多いという育て方の特徴も明らかにされた。

## 参考文献

- 赤間 公子・石山 らづ美・金納 史佳 (2020) 幼児用レジリエンス尺度開発のプロセス (Ⅱ) 信州豊南短期大学紀要 (37) : 1-22
- 遠藤 敏彦 (2017) 赤ちゃんの発達とアタッチメント. ひとなる書房出版 P63-64.
- 枝廣 淳子訳 (2003) 強い子を育てるころのワクチン：メゲない、キレない、ウツにならないABC思考法. ダイヤモンド社
- 堀池 美菜子・富田 昌平・村田 陽子・久保 秀和 (1999) 幼児の園生活におけるストレスに関する研究. 幼年教育研究年報, 21, 19-25.
- 嘉数 朝子・井上 厚・白石 敏行 (1994) 幼稚園における幼児の心理的ストレス及び対処行動. 琉球大学教育学部紀要, 45, 15-29.
- 小林 真 (2003) 幼稚園生活における幼児のストレス対処行動—保育者の評定に基づく実態調査—富山大学教育学部紀要 N o57 : 167-174.
- 古内 さや子・長田 洋和 (2015) 就学前児のレジリエンスが問題行動に及ぼす影響. 専修人間科学論集 心理学篇 Vol. 5, No. 1, 23-29.
- 小藪 江幸子 (2016) 「保育者の見守り行動」についての検討～生きる力の基礎を培う“見守り行動”を探る～. 淑徳大学短期大学部研究紀要第55号
- 小花和 Wright 尚子 (2004) 幼児期のレジリエンス ナカニシヤ出版
- 小花和 Wright 尚子 (2002) 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス. 日本生理人類学会誌 Vol.7, No.1
- Masten AS, Gewirtz AH, Sapienza JK (2013) Resilience in Development: The Importance of Early Childhood. Encyclopedia on Early Childhood Development
- 村木 良孝 (2016) レジリエンスの統合的理解に向けて：概念的定義と保護因子に着目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要 (55), 281-290.
- 本多他 潤子・小林 育子・櫻井 登世子・安村 清美・鈴木 力・成田 眞・高嶋 景子・中原 篤徳 (2007). 保育現場において認識されている男性保育者の特徴. 田園調布学園大学紀要, 1, 153-176.
- 中山 美佐 (2019) 乳幼児の発達と保育者のかわりについて：2歳児事例・4歳児事例からの考察. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 9, 263-268.
- 長尾 史英・芝崎 美和・山崎 晃 (2008) 幼児期レジリエンス尺度の作成. 幼年教育研究年報 30, 33-39.
- 戸田 大樹・松本 佳代子・氏家 博子・荒木 由紀子・飯塚 汐里・高橋 健司 (2017) 男性保育者の必要性和理想的な保育者の男女比に関する意識調査 — 保育者志望学生と女性保育士を中心として. 創価大学教育学部・教職大学院教育学論集 (69), 3-17.
- 高稿 順子・橋本 多恵・首藤 敏元 (2006) 幼児のストレスと保育者の働きかけ. 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学), 55(2), 133-140.
- 高辻 千恵 (2002) 幼児の園生活におけるレジ

- リエンス尺度の作成と対人加藤場面への反応による妥当性の検討. 教育心理学研究, 50(4), 427-435.
- 高濱 裕子 (2000) 保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応. 発達心理学研究, 11(3), 200-211.
- 上島 博 (2020) イラスト版子どものレジリエンス, 合同出版, 102-103.
- 山田 汐莉・渡辺 弥生 (2008) 幼児のレジリエンスと対人葛藤場面における対処方略, および母親の介入行動との関連性に関する研究